

めざせ50種！兵庫のゲンゴロウ

八木 剛

あまり知られていないが、兵庫県は、わが国屈指の「ゲンゴロウ県」である。森・北山(1993)によると、兵庫県からは45種のゲンゴロウ類(ムカシゲンゴロウ科、コツブゲンゴロウ科、ゲンゴロウ科)が記録されており、北海道の51種に次いで、全国2番目の種数となっている。県土が広いから当たり前といえはそれまでだが、地下水性の2種がいずれも記録されていること、青野ヶ原に小型稀少種が集中して分布していることなど、他県にはない条件に恵まれていることも事実である。その一方で、流水性種の記録が少ないなど、まだ全容の解明に至っていないことをうかがわせる。

その後、高橋(1997)は、過去の文献によるゲンゴロウ類の記録を整理した。それによると、ゴマダラチビゲンゴロウの古い記録が追加され、兵庫県のゲンゴロウ類は46種となった。その一方で、過去数十年間に一度も記録のない種が多いことも明らかとなった。本稿では、今までに記録のない2種をあらたに追加するとともに、今後再確認の必要がある種、発見の可能性のある種をピックアップし、生息環境の情報を付して会員諸兄の注意を喚起したいと思う。

1. 新たに追加または再確認された種

いずれも溪流性か、それに近い性質を持つ種である。これらを加えると兵庫県のゲンゴロウは48種となる。標本はすべて兵庫県立人と自然の博物館に保管されている。

ゴマダラチビゲンゴロウ *Neonectes natrix* (図1)

【採集記録】

青垣町西芦田加古川 alt.120m 135° 01' E, 35°

14' N, 2000.VI.23, 38exs. 八木 剛採集

流水性の小型種(2.9-3.7mm)。顕著な斑紋により見誤ることはない。水上郡佐治で古い記録がある(山本,1958)ことが高橋(1995)で紹介されているが、その後記録がなかった。今回見つかった産地は、トンボ類の採集地として有名な「ゆりやま橋」付近の加古川(佐治川)本流である。伏流水のしみ出し口や本流脇の水たまりの隙間に多数生息し、モンキマメゲンゴロウと共存していた。採集してみればわかるが、

本種は通常の水生昆虫の調査法ではまずかからない。礫をそっとひっくり返し水底を歩いている個体を発見して丹念に採集するか、砂礫を虫がつぶれるくらい激しくかき混ぜて目の細かい網ですばやくすくい取る必要がある。丹波の伏流河川に固有のものか、広く分布するものなのか、要注目である。

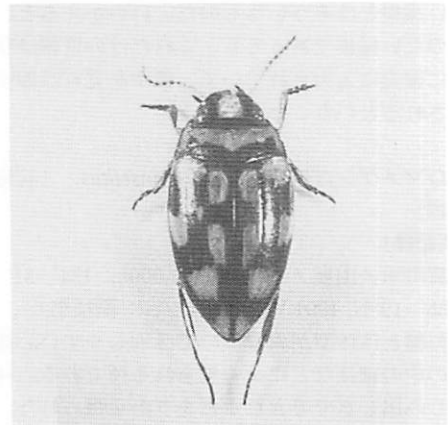


図1 ゴマダラチビゲンゴロウ
青垣町西芦田産 ♂

サワダマメゲンゴロウ *Platambus sawadai* (兵庫県初記録)

【採集記録】

温泉町扇ノ山 1992.V.? 標高等不明 3exs.

八木 剛採集

波賀町引原ダム(灯火) alt.480m 134° 33' E, 35°

14' N, 1998.VI.30. 2exs. 八木 剛採集

モンキマメゲンゴロウの無紋タイプに似るが、全体にざらついた感じがするので慣れれば同定は容易。大岩が連続するような溪流脇の水たまりなど、ゲンゴロウ類の中では最も上流部に現れる種である。しかし、生息しているのは流れがないか緩やかなたまり部である。扇ノ山では、水流のほとんどない源流部の、落ち葉のつもったたまりで得られ、引原ダムの灯火では、多数のモンキマメゲンゴロウ、オナガミズスマシと同時に得られた。各地に分布しているものと思われるが、平野部や浅い山地にはまず見られないだろう。

(余談であるが、扇ノ山のデータはメモを紛失したため不明だ。あるべからずの失態ではあるが、虫屋の認知パターンを考察する上でよい材料なので、私の記憶を紹介しよう。この3個体は、私が大学院の2年のとき、神戸大学の内藤親彦教授と私の一級下の学生のシダハバチ幼虫のサンプリングに同行した際に得たものである。しかし、どうしても地図上での場所が思い出せない。憶えているのは、同行者、周辺環境、同日タニウツギの花でフタスジカタビロハナカミキリを採集したことだけである。主体性のない採集とはそういうものだ。いいかえると、主体性のない採集であっても、これだけの情報は私の記憶に確実に入力されていて、標本を見れば即座に検索されるということである。)

コクロマメゲンゴロウ *Agabus insolitus* (兵庫県初記録)

[採集記録]

波賀町氷ノ山坂ノ谷林道 alt.1,000m 134° 31' E, 35° 19' N, 1991.VII.5 4exs. 八木 剛採集

近似種とは体型が異なるので区別しやすい。高層湿原の中の細流などによく見られる種である。林道脇のしみ出し水でできた水たまりから得られた。クロマメゲンゴロウかホソクロマメゲンゴロウと共存していることが多いが、本種の方が流れのある部分を好むようである。ていねいに探せば各地で発見されることと思う。

2. 文献記録あるいは古い記録のみで再確認の必要がある種

コセスジゲンゴロウ *Copelatus parallelus*

原産地が「Settsu」だから、兵庫県にも○がついているのだろう。大阪府淀川河川敷での洪水採集(大雨の後の河川敷のゴミあさり)で得られたというから、円山川や加古川が狙い目だろう。見つければ快挙である。

テラニシセスジゲンゴロウ *Copelatus teranishii*

セスジゲンゴロウ属は、いずれもパイオニア的性質が強く、河川敷の水たまりなど不安定な環境が狙い目である。しかし、普通種のホソセスジゲンゴロウを除くと、嗜好する環境の幅が狭いようで、私も未だ本種の生息環境を確実にイメージできない。本種はセスジゲンゴロウやカンムリセスジに酷

似しており、ゲンタリヤで区別する。とりあえずそれらを採り貯めておき、標本を詳しく調べるしかないだろう。

キペリマメゲンゴロウ *Platambus fimbriatus*

流水性の種である。モンキマメゲンゴロウとは、体型や斑紋で容易に区別できる。モンキマメやゴマダラチビゲンゴロウよりも下流側が主な生息環境らしいが、私はいまだかつて姿を見たことがない。武庫川、猪名川、氷上で古い記録がある(高橋,1997)。近隣県でも文献記録が多いようで、ひょっとするとカワラバタのようにいつのまにか姿を消している種なのかもしれない。要注目である。

スジゲンゴロウ *Hydaticus satoi*

全国的に近年の記録がほとんどなく、絶滅が心配されている。平地の止水域を主たる生息地とする種であると思われるが、過去の情報からは特殊な環境に生息しているというわけではなく、手がかりがないのが現状だ。

マダラシマゲンゴロウ *Hydaticus thermoncctoides*

本種も全国的に絶滅が心配される種である。ジュンサイやヒツジグサの生える、貧栄養なため池、湧水の豊富な休耕田に生息する。本種のいそうな環境はあちこちにあるのだが、稀な種である。貧栄養な池や休耕田で、コシマゲンゴロウが一すくいでも何匹も入るような状況ならば要注意。サイズや動作がそっくりなので見落としがちだが、腹面が濃色なので、あれっ?と思ったらよく見てみるべきだ。

マルコガタノゲンゴロウ *Cybister lewisianus*

コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus*

スジゲンゴロウ同様、この両種はほぼ絶望的である。

3. 未記録だが今後発見の可能性のある種

次の5種は、発見される可能性を持っているが、どの種も手強い。なお、近年、クワガタほどではないが、ゲンゴロウの飼育も趣味として拡がりつつある。それ自体はけっこうなことであるが、「カゴヌケ」が多発する前に、今現在の分布をきちんとおさえておきたいところだ(特にオオイチモンジシマ、シャープゲンゴロウモドキ)。

ナガマルチビゲンゴロウ *Leiodytes kyushuensis*

岡山県犬島と九州で記録されたかなりの珍品。止水性の小型種である(1.7-1.9mm)。私は本種の採集経験がないのでよくわからないが、一般に小型種が多い場所というのは不思議なもので、かたまっている種が見られるものである。ツブゲンゴロウの類がやたら多かったりマルケシの類が見つければ、要注意で、攻め方を変えるべきだ。通常の水アミではもれてしまうので、水草ごとすくい上げ、車のボンネットやブルーシートの上にぶちまけて丹念に探す必要がある。岡山の犬島は瀬戸内海の島なので、家島や淡路が狙い目か。

シマケシゲンゴロウ *Coelambus chinensis*

三重県から九州までの間、分布が空白となっている。関東地方では平地にも生息しており、環境がどうのということではなさそうだ。私の採集経験では、いずれも海岸に近い平野部のやや富栄養な池や沼で、トンボが多く見られそうな環境である。本来は「砂丘モノ」(砂地の池を好む種)なのかもしれない。

キボシツブゲンゴロウ *Japanolaccophilus nipponensis*

渓流性の種である。森・北山(1993)を引用すると、高知県黒尊川の例では「かなり上流部で、5月上旬、本流の岩の影でやや流れの緩やかな木の枝や落葉などがたまった所や岩に生えたコケの間など」だそうである。本人らも本種の採集にはかなり苦労したらしい。溪流を丹念に探すしかなさそうだ。見つかる可能性はあると思う。

オオイチモンジシマゲンゴロウ *Hydaticus conspersus*

シマゲンゴロウより一回り大きく(16-17mm)、独特の斑紋があるのでまちがえることはない。生息環境は、湧水に涵養されていて、落葉や枯れ枝が蓄積した林内の薄暗い池、である。水生植物はほとんどないことが多い。だから、スギ林内の水たまりでよく得られている。スギは水分条件のよいところに植栽されているからだろう。本種のいそうな水たまりはあちこちにある。そのたびに網を入れるのだが、たいていはマメゲンゴロウかアメリカザリガニしか入らない。しかし、あきらめてはいけない。きっといるはずだ。灯火で得られることもある。京都府、滋賀県で最近の記録がある。

シャープゲンゴロウモドキ *Dytiscus sharpi*

ゲンゴロウより小型で、脚が長く、体腹面は黒色である。メスの上翅には爪で引っ掻いたような溝がある。滋賀県、京都府、山口県でも得られており、兵庫県の威信にかけてぜひとも発見すべき種である。なぜなら、本種の生息地はトキヤコウノトリの生息地とよく一致しているからだ。ということは、狙いは豊岡盆地しかないだろう。しかし、私の乏しい調査経験からして、当地は圃場整備が進みすぎ、加えて「ザリガニ帝国」と化している。昔ながらの田んぼが谷一つでも残っておれば可能性はあると思うが、どうだろうか。「コウノトリの郷公園」は、地形的には私の知る生息環境のイメージに近い。

本種は、普通のゲンゴロウ採集の感覚ではまず得られない。丘陵地の休耕田や未整備の水田の水路の、コナギやヒルムシロ、カンガレイなどが生えた泥深いところに生息しており、他のゲンゴロウ同様夜行性で昼間は泥にもぐっている。だから表面をなでるような優しい採集ではダメである。植物を踏み倒し、泥をグチャグチャかき混ぜる。しばらくすると、ヌタ場と化した水面に、ガムシやコオイムシに混じってポコリ浮いてくる。ゲンゴロウ(タダゲン)と混獲することは稀である。

<参考文献>

- 森 正人・北山 昭(1993) 図説日本のゲンゴロウ
文一総合出版 217pp.
高橋寿郎(1995) 兵庫県の水棲甲虫に関する文献
目録(1) きべりはむし23(2),p.1-9.
高橋寿郎(1997) 兵庫県産水棲甲虫目録(1)
きべりはむし25(1),p.2-10.

(YAGI TSUYOSHI 三田市弥生が丘6
兵庫県立人と自然の博物館系統分類研究部)